

【学力向上フロンティアスクール用中間報告書様式】(中学校用)

都道府県名	富山県
-------	-----

学校の概要(平成15年4月現在)

学校名	大山町立上滝中学校					
学年	1年	2年	3年	特殊学級	計	教員数
学級数	3	4	4	0	11	24
生徒数	105	126	123	0	354	

研究の概要

1. 研究主題

生徒一人一人の学力を高める学習の在り方

2. 研究内容と方法

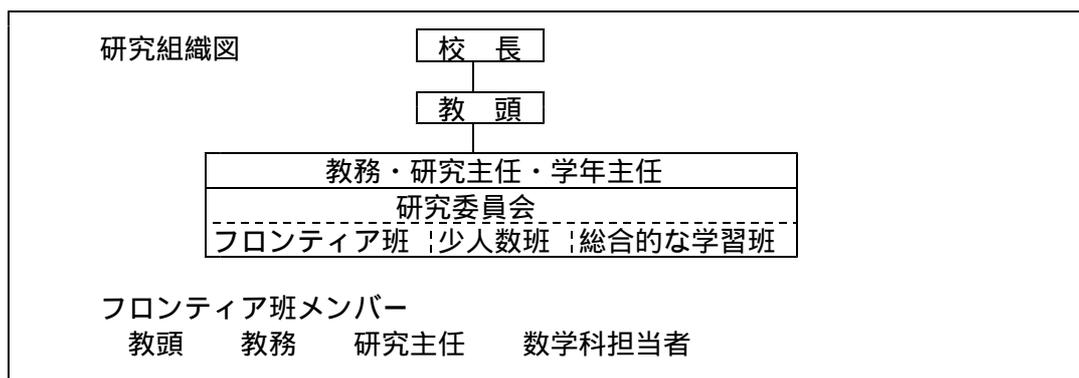
(1) 実施学年・教科 (平成15年度)

1年・数学
<ul style="list-style-type: none"> 生徒の理解の程度に差が出やすい教科であるため。 中学校入学時に学力の差がついている教科であるため。 個に応じた適切な援助をすれば、確実に理解が深まるとされる教科であるため。

(2) 年次ごとの計画

平成15年度	<p>テーマ</p> <p>生徒一人一人の学力を高める習熟度別学習をするためには、どのような方法でクラス分けをすればよいか。また、それぞれのクラスの指導にどんな工夫をしたらよいか。</p> <p>研究の見通し(仮説)</p> <p>習熟度別学習を取り入れ、一人一人に応じた指導を行うことによって、生徒の学習意欲を高め、学力を向上させることができる。</p> <p>研究の内容・方法</p> <p>生徒一人一人の実態に応じた指導の充実をはかるため、次のことについて研究する。</p> <ul style="list-style-type: none"> 習熟度別のクラス分けの方法 指導方法(特に、「方程式の解き方」と「平面図形」について) 教材、教具の開発 自己評価の工夫
	<p>テーマ</p> <p>生徒一人一人の学力を高める学習を充実させるためには、指導方法、指導体制をどのように改善すればよいか。また、評価を指導にどう生かせばよいか。</p> <p>研究の見通し</p> <p>指導方法・指導体制を工夫改善することにより、生徒一人一人の実態に応じた支援が可能となる。また、評価を分析し、指導に生かすことで、生徒の学習意欲を高め、学力を向上させることができる。</p> <p>研究の内容・方法</p> <p>前年度の研究結果を受け、指導方法・指導体制を工夫改善する。また、評価の仕方、評価を生かした指導法を研究する。</p>

(3) 研究推進体制



平成15年度の研究成果及び今後の課題

1. 研究の成果

クラス分けの方法についての研究が深まった。今年度は、1年生の数学で3学級を習熟度で4クラスに分けて授業を行った。

【クラス分けの仕方】

単元のはじめに実施する「準備テスト」の結果などを参考にして、生徒に希望アンケートをとり、それをもとに教師がクラス編成をする。基礎の学習内容に時間をかけて学習する**基礎習熟コース**を1クラス、基礎の学習内容に重点を置いて学習を進める**基礎拡充コース**を2クラス、基礎の学習内容について説明したり、発展的な内容に取り組んだりする**基礎応用コース**を1クラス設けた。原則として、単元ごとに編成替えをした。クラスの人数が少ない方が学習効果は上がると考えられる。**基礎習熟コース**の人数を他のクラスより少なくして、基礎的な内容が身に付くように配慮した。

【習熟度別学習の実態】

毎時間、指導略案をつくり、どのクラスもほぼ同じ進度になるように配慮した。クラスの実態に応じた授業展開を担当教師で工夫した。どのコースも、ほぼ力に差のない生徒の集団であるため、授業展開の構想がたてやすい。また、普通学級より人数が少ないので、生徒は、発言や質問がしやすく意欲に取り組むことができた。

【指導計画例】 方程式（全13時間）

コースによって、時間をかけて学習させたい内容が違うので、各コースに応じた計画を立てた。基礎習熟コースでは基礎の内容に時間をかけて学習するようにした。基礎応用コースでは、自ら考える場として、問題作りの時間を設けた。

時	基礎習熟コース	基礎拡充コース	基礎応用コース
1 ~4 5	・等式の性質を使って、簡単な方程式を解くところまで (どのコースも同じ) ・移項を理解し、移項の考えを使って方程式を解く (移項が1か所)		
6	・移項が2か所の方程式を解く	・移項が2か所の方程式を解く ・かっこを含む方程式を解く	(移項が2か所) ・かっこを含む方程式を解く
7	・かっこ、小数、分数を含む方程式を解く	・小数、分数を含む方程式を解く	
8	・方程式を解く復習をする		
9	・方程式を用いて文章題を解くときの手順を理解する		
10	・代金の問題を方程式を用いて解く	・代金の問題を解く ・過不足問題を方程式を用いて解く	
11	・過不足問題を方程式を用いて解く	・速さ、時間、道のりの問題を解く	
12	・具体的な数を用いて、速さ、時間、道のりの関係を理解する	・速さ、時間、道のりの問題を方程式を用いて解く	・方程式使う問題づくりをする
13	・速さ、時間、道のりの問題を方程式を用いて解く	・まとめの問題をする	

【自己評価】

次の形式のものを授業の終わりに書かせて、一人一人の取り組み状況を把握し、指導に生かした。

月日	評価項目	今日のキーワード	印
	自分の学習態度は? A B C		
	今日の学習内容は? A B C		
	今日の発表は? A B C		
	次時の自分のめあて		

この自己評価は、一人一人の生徒の理解度をみるのに役立つ、次時の指導の見直しができた。例えば、「今日の発表は？」のところに C をつけている生徒が多い場合、次時には発表ができる発問を増やした。特によく学習した生徒には、「とても集中していましたね。次のがんばろう。」などとコメントを書き、励ました。「今日のキーワード」欄には生徒自身がその授業で大事だと思う言葉を書く。これらの言葉をカードに書いて、次時に黒板にはると、復習ができる。

【生徒の意見】

2学期末に「4クラスに分けた授業は、あなたの数学の力を伸ばすことにつながっていますか。」という質問をした。結果は、肯定的な意見、中立の意見、否定的な意見の人数がいずれも全体の3分の1程度になった。習熟度別学習のよさが、まだ十分には発揮されていないのではないのかと思われる。しかし、基礎習熟コースの生徒には、「自分に合ったクラスで勉強がしやすい。」「授業がよく分かる。」など習熟度別学習を好む生徒が多かった。

2. 今後の課題

- ・毎時間習熟度別学習を続けていると、習熟度の低いクラスほど集中力がなくなり、学習内容が定着しない。今後は、毎時間習熟度別学習をするのではなく、指導内容によって、普通学級、習熟度別の指導を組み合わせる工夫が必要である。
- ・1学級を2つに分けるなどの工夫をして、普通学級での人間関係を有効に活用するとともに、1クラスの人数を減らすことで、学習内容の定着度を高める。
- ・クラス分けでは、生徒の希望を尊重するが、友人関係などにより、自分の力に合わないコースを選ぶ生徒への支援をの在り方を工夫する。
- ・クラスの生徒の実態に応じた指導方法、教材、教具を開発する。特に、生徒が興味をもって取り組むことができる課題提示を研究する。

学力把握のための学校としての取り組み

- ・小単元の学習を終えるたびに、確認テストを行い、一人一人の到達度を確認し、その後の指導に生かす。
- ・夏休み明け、冬休み明けに基礎計算テストを行って定着度を分析し、正答率の低い問題は、家庭医学習でも確認させ、基礎・基本の定着を図る。
- ・本年度の学習内容の状況を捉えるために、2月にCRT検査を行う。一人一人の結果を保護者にも知らせる。

フロンティアスクールとしての研究成果の普及

- ・9月16日 要請訪問研修会（公開授業） 地域、保護者に公開
- ・11月4日～7日 学校公開週間 地域（小学生も）保護者に公開

次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。（複数チェック可）

- 【新規校・継続校】 15年度からの新規校 14年度からの継続校
- 【学校規模】 3学級以下 4～6学級
 7～9学級 10～12学級
 13～15学級 16学級以上
- 【指導体制】 少人数指導 T・Tによる指導
 その他
- 【研究教科】 国語 社会 数学 理科
 外国語 音楽 美術 技術・家庭
 保健体育 その他
- 【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】 有 無